



## 生き延びるための 〈脱出〉

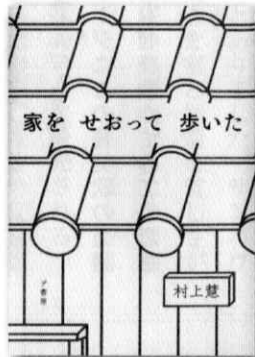
書店 Title 店主  
辻山良雄



『裸足で逃げる——  
沖縄の夜の街の少女たち』  
上間陽子著  
太田出版  
1700円



『家出ファミリー』  
田村真菜著  
晶文社  
1600円



『家をせおって歩いた』  
村上慧著  
夕書房  
2000円

の社会は狭く、連れ戻されては同じ連鎖の中に戻ってしまう。そうした彼女たちの話を、著者は自分の身体全体で受けとめるように、向かい合って〈聞く〉。

そのように書かれた文章は、彼女たちの前でまず「読み合わせ」される。著者の声により語られた自分の物語を、目の前で聞いた少女たちの中には、堰を切ったように泣きはじめるものもある。外から自分がある世界を覗き込むことではじめて、彼女たちは自分の本当の声を聞いたのかもしれない。彼女たちの物語は、その当人たちのみならず、その話を聞いた著者や、それを読む私たちにも、自分のいる場所を見つめ直すきっかけとなる。

自分の体験をもとに書かれたノン

フィクション・ノベル『家出ファミリー』も、父親の暴力から逃れるように旅に出た、10歳の少女の物語。母と妹の三人で、野宿をしながら全国を流れていく旅は、どこか家族としての居場所を探す旅のようでもあり、旅先で起こる過酷な出来事の中から、母と娘それぞれが、自分自身を見つけていく話にもなっている。家族はすでに〈ある〉ものではなく、〈なる〉ものだと、読んでみて改めて気付かされる。

主人公たちは、切羽詰まった状況に置かれたときに、「この場所で生きていくには、どう行動するのがよいのか」という、生存本能に目覚めていく。それは生きる力そのものの回復と言えるかもしれないし、そこでは世間の常識は役に立たない。全篇

ある人が毎日を生きている世界は、変わらないものとしてそこにあるように見える。しかし場合によっては、それは変えられるものであり、その世界が気に入らなければ、そこから脱出することが、生き延びることと直結する場合だってある。

『裸足で逃げる』は、沖縄で未成年の少女たちの調査、支援に携わる著者が、年若くして風俗業界で働くようになった女性たちの話を聞いた記録。内容が特定されないように名前などは変えられているが、彼女たちの語り口を活かした文章は、抑制はされつつもそこで起こったことを、臨場感をもって伝える。

彼女たちの多くは、貧困や暴力が影を落とす家庭環境の中で育った。そこから抜け出したくても、島の中

をつらぬく弱者に対する共感と理解の視線は、常識側につきがちな強者の論理からは離れた、別の可能性を照らすものだ。

定住での生活は閉じている。そう気が付いた現代美術家が、発泡スチロールの家を担いで歩き、国内を移動しながら生活した記録が『家をせおって歩いた』。住み慣れた日常を離れ、行く先々で出会う人と話してみると、その体験はいつもより色がつきりしたものとなり、身体のどこかに堆積していく。

家は定まった地面に立つものだけではない。ひとつところに定住している内にそこに疑問が生じれば、とりあえず動いてみてもよい。自分のいるところがどこであれ〈家〉になることを、この本は教えてくれる。